魯迅はいかに「東アジア」であるのか？[1]

董炳月[2] 著　中尾弥継 訳

「東アジア」を枠組みや視点として魯迅を理解し、それにより「東アジアの魯迅」が誕生した。間違いなく、「東アジアの魯迅」は、魯迅を解釈し、魯迅研究を深め、魯迅の価値を再評価するための重要な次元である。しかし、留意しなければならないのは、「東アジアの魯迅」というこの概念の性質は比較的複雑だということである。それは単なる方法論ではなく、魯迅の本質や魯迅の価値に対する理解を含み、魯迅の東アジア意識、魯迅の東アジア属性、魯迅の東アジア読者など、異なる方面の問題を含んでいる。ここでは、私は主に三つの方面から「東アジアの魯迅」に対する検討を進める。

一、日韓両国における「東アジアの魯迅」の構築

魯迅は近代中国の優れた文学者、思想家、革命家であり、何よりまず「中国の魯迅」なのである。このような「中国の魯迅」を「東アジアの魯迅」として構築を進めるにあたり、その前提として「中国」を超えて「東アジア」の視点を用いることである。魯迅研究史上、「東アジア」という視点は、まず中国の読者や研究者に属するものではなく、日本や韓国の読者や研究者に属するものである。「東アジアの魯迅」は主に日韓両国の言語体系において構築されて来たのである。

まず日本を見てみよう。どの日本人が最初に魯迅を「東アジア化」したのだろうか？これは考察を待つ問題である、しかし、肯定できるのは、著名な作家である佐藤春夫（1892–1964）は初期の代表者の一人ということである。1936 年 10 月 19 日の朝に魯迅は上海で世を去り、その晩、遠く東京にいた佐藤春夫は訃報を聞き、追悼文「月光と少年と――魯迅の芸術」を執筆し、魯迅を「東アジア化」（東洋化）した。彼は文中で魯迅を「東洋の文学者」「純粋な東洋人」と称え、「私と魯迅は一度の面識もない、偶然にもこの世で不世出の偉大な東洋の文学者と同じ時代に生まれて、ついにお会いする機会を永久に失った、これは単なる残念な出

来事とは言えない、永遠の残念事である。」「彼以上の西洋的教養を持つ東洋人は少なからずいるだろう、しかしこれらの教養を持ち終始一個の純粋な東洋人でいられる者はまた何人いるだろうか？」[(3)] と言い、日中戦争時期には、日本政府も魯迅を「東アジア化」した。1943 年 11 月上旬、日本政府主導の「大東亜会議」が東京で開催され、いわゆる「大東亜共栄圏」の「五原則」が提唱された。日本文芸家の戦時中の組織である日本文学報国会（1942 年 5 月設立）は、軍国政府の「五原則」に歩調を合わせるため、著名な作家である太宰治（1909–1948）に魯迅を主人公とする小説を創作する、つまり魯迅を「東アジア化」するよう依頼した。太宰治はそれゆえ長編小説『惜別』を創作した、魯迅の仙台での留学生活および藤野先生との関係を題材として、中日両国の「親和」問題を表現したのである [(4)]。魯迅の「東アジア化」は同様に日本の学術界にも存在する。著名な学者である藤井省三は長期にわたり魯迅を「東アジア化」した。2002 年、彼は『魯迅事典』の「前言」で、「魯迅は東アジア共通の文化遺産であり、近代的古典である」と述べ、魯迅を「東アジアの『文化的英雄』」と称えている [(5)]。彼が 2011 年に出版した専著『魯迅――東アジアを生きる文学』（『魯迅：生長在東亜的文学』）、その書名がまさに魯迅と東アジアとの関係を浮き彫りにした。本書の第七章「日本と魯迅」では日本と魯迅の関係を専門的に論じ、第八章「東アジアと魯迅」では、香港、中国台湾、シンガポール、朝鮮、韓国、など、さまざまな地域や国における魯迅の存在形態を幅広く探っている。本書の中国語版はすでに出版されており、『魯迅的都市漫游：東亜視域下的魯迅言説』である。[(6)] 以上に挙げた三つの例は、日本において、魯迅の「東アジア化」が一つの歴史的課題であり、すでに伝統を形成し、かつ学者、作家、官僚など異なる立場の人々が等しくこれまでその中に関わってきたことを示している。

ここ数十年間、韓国の魯迅研究者も「東アジアの魯迅」の構築に貢献している。私は韓国語に通じておらず、韓国の魯迅研究界の状況に対しても全体的把握を欠いているが、しかし、韓国の学者の魯迅研究成果の中国語翻訳によって、すでに上述の結論を得られている。2005 年に出版された『韓国魯迅研究論文集』[(7)] はおそらく中国大陸で出版された最初の、韓国の学者による魯迅論であり、朴宰雨先生はその「序一」の中で、魯迅の「東アジア」属性を強調し、「魯迅は 20 世紀東アジアの歴史において非常に重要な思想的、文化的、人的資源である。彼はまず

第一に中国の知識人であるが、しかし東アジアの知識人でもある」と述べている。本書に収録されている徐光徳先生の論文「東亜話語和魯迅研究」は意識的に「日本の事例を通じて、東アジア地区ビジョンが魯迅研究および中国近代文学研究の発生と関係に与えた影響を考察し、反対に魯迅研究が「東アジア言説」を形成することに対して理論的根拠を提供しているかどうかを検証する」としている。2016年出版の『韓国魯迅研究精選集』（第二輯）[8] には、洪昔杓先生の大作「為想象東亜共存――魯迅与朝鮮」を収録し、かつ2006年『南方週末』の「韓国思想界的恩師」である李泳禧先生（1929–2010）に対するインタビューも収録した。李泳禧先生は「韓国の魯迅」と称されており、この「韓国の魯迅」は魯迅を師と仰いでいる。1995年、李泳禧先生は「吾師魯迅」と題する文章の中で、「もし、私が記した著作や私の思想、私の人生に対する態度が現代の青年たちに対してこのような影響を引き起こしたのであれば、それはこの栄誉は近代中国作家であり思想家である魯迅に帰するべきでしょう。40年近く過ぎ去った歳月において、私は韓国現実社会に抵抗する態度で相当量の文章を書いたが、これらの文章は思想において魯迅と相通じるものがある。したがって、もし私がこの社会の知識人や学生に対して何がしかの影響を生み出したとすれば、それは間接的に魯迅の精神や文章を伝えたに過ぎない。」と明言している。朴宰雨先生が同書に収録されている論文「20世紀接受魯迅的韓国知識分子類型考察」では、李泳禧先生の魯迅に対する影響の受容を「実践的思想家型」の受容と定義している。李泳禧先生が「韓国の魯迅」として誕生したことは、魯迅の精神が戦後の韓国社会における大きな影響力を示しており、同時に魯迅の文化遺産の実用的転換を意味している。これは別種の類型のもので、より深い意味での「魯迅の東アジア化」である。このような性質の「東アジアの魯迅」は同様に戦後の日本にも存在する――例えば大江健三郎、竹内好、丸山昇などの人物である。

日韓両国の「東アジアの魯迅」を一つの総体として見ると、「東アジアの魯迅」は学術用語であり、政治用語でもある。解釈的であり、発見的であり、実践的で創造的でもある、と見なすことができる。「東アジアの魯迅」とは、アイデンティティーの異なる構造主体によって構築されており、ゆえに十分豊富な意義を含んでいる。日韓両国の魯迅研究の状況は中国魯迅研究者の視野に達しており、中国学者の魯迅研究と相互に影響をなし、そこで中国学者も「東アジアの魯迅」とい

う命題を述べ始めている。関連する文章の中で、張夢陽先生の「跨文化対話中形成的『東亜魯迅』」(9) は代表的な一篇である。その文章では、「魯迅研究について言えば、文化を跨いで対話することを進める、最も都合よくまた最も直接的であるのは中、日、韓三国の魯迅研究学者間の対話、すなわち東アジアの学術討論である。」「事実上、二十年近くのたゆまぬ努力を経て、中、日、韓三国はすでに「東アジアの魯迅」というこの斬新な魯迅の映像を形成した。」と指摘している。

では、この「東アジアの魯迅」は、どのような意味において魯迅の歴史的真実に合致しているのだろうか？

二、魯迅の「東アジア意識」の欠乏

魯迅本人が「東アジア」意識を持っていたかどうか？その答えは否定的である。関連する問題として、趙京華先生が長編論文「在東亜歴史劇変中重估魯迅伝統———論魯迅的『東亜意識』及其影響力」(10) の中で専門的に論じている。彼は「かつて日本に留学し明治維新後急速に高まったアジア主義思潮に触れた作家としての魯迅は、その後の生涯の思想文学の中で、日本に対して基本的に『沈黙』を守っただけでなく、朝鮮半島や台湾地区の植民地状況に対しても特別な関心を示していない、彼の『東アジア意識』は相当に淡泊であったと言える。」「魯迅が『日本』をほとんど語らず、『東アジア意識』を欠くのは、確かに一つの歴史的謎である。」と指摘している。私は彼の基本的な見解には同意する、まさしく魯迅には「東アジア意識」が欠けている。しかし、これは必ずしも「歴史的謎」ではない。魯迅になぜ「東アジア意識」が欠けていたのか、社会の現実と価値観の二つの側面から具体的に分析を行うことができるのである。

現実の側面では、魯迅が存命の頃は、中、日、韓三国から構成される北東アジアに発生する分裂と衝突の時代であった。甲午戦争に始まり、日本が中国を侵略し、朝鮮半島を併合して、東アジア地区において重大な災難を引き起こした。魯迅は冷静な現実主義者として、この残酷な現実に直面して、一個の総体性や同一性を持った「東アジア」を夢見るはずがなかった。実際、魯迅の心の中では、日本は危険な新興帝国主義国家として、中国の脅威として存在していたが、しかし大韓民国（朝鮮）は、様々な理由により魯迅の認識対象とはなっていない。魯迅と日本・韓国というこのような関係は、二つの重要な事例により説明することが

できる。―― 一つは日露戦争前後の日本への理解と日本での経験、もう一つは尹奉吉の義挙に対する沈黙である。

1903 年、帝政ロシアが中国東北領土を侵略占拠することを企て、中国人のロシア排斥運動は再び高まり、東京の中国人留学生がロシア排斥義勇隊を組織するまでに至った。1904 年初頭、日露戦争が勃発し、一部の中国人は日本と連合してロシアに対抗することを想像する人もおり、中国言論界にはロシアを弾圧して日本を支持する傾向が現れた。蔡元培、何閬仙らが上海で創刊した新聞『俄事警聞』はその類である。しかし、当時日本に二年余り留学していた青年魯迅は、すでに日本の帝国主義の本質を看破していた。同級生の沈瓞民の記憶によると、魯迅はかつて蔡元培と何閬仙に手紙を書き、自身の見解を述べた――

> 魯迅は言う、日本軍閥は野心満々で、隠れて悪事を企み、その上日本とロシアは隣接しており、もし帝政ロシアが失敗した後、日本が東アジアを独占すれば、中国は災難に遭い更に毒されることになる。そこで彼は蔡と何に三つの意見を提示した：
>
> （一）日本を支持してはいけないと主張する。
>
> （二）「同じ言語、同じ人種」、口腹が全く異なる論調で、中国人を欺いてはならない。
>
> （三）中国人が国際情勢に対して真摯に研究するよう忠告するべきである。
>
> 原文を写し取っていないが、大筋はこうである。私は上海に行き、蔡、何両君にお渡した。その後『俄事警聞』は魯迅の意見を採用し、主張は転換された。求学時代の魯迅は、すでにロシアと日本が帝国主義であり、中国を侵略する敵であることをはっきりと認識していたが、当時このような視点を持っていたことは、賞賛に値するものだ。(11)

日露戦争は日本の勝利で終わりを告げ、黄色人種が白色人種を打倒し、アジア人がヨーロッパ人を打倒した、この事実が「東アジア意識」を育む温床となったのである。周作人が言うような、「当時の中国知識階級は最も深刻に自国の危機を感じており、何より憂慮されるのはいかにして自国を救うのか、西洋各国の侵略を免れることが出来るのかである、だから日本維新の成功を見て、変法自強の道

を見つけた時は、非常に興奮し、ロシアに対する勝利を見て、更に少なからざる勇気が増した、西洋に抵抗し、東アジアを保全しようと考えるのは、不可能な事ではない。中国は日本に留学生を派遣している、その意図はほとんどここにある、我々留学している者は法政・鉄道・警察を短期養成することを除いて、やはり自然とみなこの影響を受けた、今の流行りで言えば、すなわち皆熱烈にアジアを興隆させるという意気込みを抱いているのである。」と述べている。(12) しかし、日本に身を置く青年魯迅には、依然として日本の勝利からは類似する「東アジア」という感覚や「アジアを興隆させるという意気込み」を得なかった。これに反して、彼は日露戦争の中から中国人の「愚かさと弱さ」を目の当たりにし、日本人の同級生たちの歓声の中で中国人の孤独を感じていた。当時、彼はちょうど仙台医学専門学校に留学していたが、この事により医学を捨てて文学に従事した。その上、仙台医学専門学校のあれら藤野先生の試験前、魯迅に問題を漏らしたことを疑った日本人学生たちは、魯迅に弱小国民の屈辱を味わわせた。そのような理解と体験は、魯迅に日本人と同じアイデンティティを感じさせることはできなかった。

東アジアのもう一つの重要な国家である韓国（朝鮮）について、かつてやはり魯迅に言及されている――例えば「『一個青年的夢』訳者序二」（1919 年）や雑文「無声的中国」（1927 年）などであるが、それは単についでに言及しただけであり、魯迅が正面から議論した「問題」にはならなかった。更に甚だしいのは、魯迅は尹奉吉（1908–1932）の義挙に対しても沈黙を守っていた。

1932 年 1 月 28 日に日本軍が上海に侵攻すると、中国軍は奮い立って抵抗し、「一・二八上海事変」が勃発した。不幸だったのは、二ヵ月後に上海は陥落し、4 月 29 日は日本の「天長節」（昭和天皇の誕生日）であり、日本側は虹口公園で「祝賀式典」を行った。朝鮮の独立運動家だった尹奉吉は会場に潜入し、手榴弾を演壇に投擲し、日本側の要人が多数死傷した。その中で日本陸軍大将の白川義則（1868–1932）は傷が深く死亡し、日本駐華公使の重光葵は重傷を負い右足を切断した。1945 年 9 月 2 日、この重光葵（当時すでに外務大臣に昇任していた）は、杖をつき、尹奉吉の爆弾で傷ついた足を引きずりながら、東京湾に停泊していたアメリカ軍艦ミズーリ号で、日本政府を代表して降伏文書に署名した。虹口公園爆破事件は中日韓三国間の多くの激しい矛盾や衝突を含み、一大センセーション

を巻き起こし、しかも魯迅の住まいの近くで起きたのだが、しかし、魯迅はいかなる評論も発表しておらず、日記にも記録しなかった。疑惑を抱かせるほどの沈黙である。

魯迅はなぜ沈黙していたのか？洪昔杓先生は1931年7月に発生した「万宝山事件」（日本植民地統治者が計画した「朝鮮人を追い出し、中国人を殺す」という事件）から解釈を行い、「この事件のために、魯迅は当時の「朝鮮」に対して極めて好ましくない印象を持った。その後は魯迅が文章の中で再び「朝鮮」を取り上げるのを見るのは困難だが、これは「万宝山事件」と一定の関係があると言わざるを得ない。この時期に至り魯迅がなお朝鮮に対して「新しい希望」を抱いていたとは言い難く、あるいは尹奉吉義士の義挙に対して直接反応しなかったのは、多少は朝鮮人の華僑に対する攻撃にも関係があったのかもしれない。「万宝山事件」が1931年7月に起こり、尹奉吉義士の義挙が1932年4月に起こったことにより、「万宝山事件」が魯迅の「朝鮮」に関わる印象に対して好ましくない影響を与えたと見るべきである。」と指摘している。[13] この解釈には一定の説得力がある。少なくとも、「万宝山事件」以降、魯迅は朝鮮義士が植民地統治に反抗し、民族の独立を目指していたという事実に関心がなかったか、避けていたのではないだろうか。補足説明できるのは、また、魯迅の沈黙はおそらく更に別の原因があったのだろう――日本側との関係に遠慮するというような。尹奉吉の爆破で負傷した重光葵と魯迅はかつて交流があった、これは魯迅日記に記録がある。魯迅の1925年9月17日の日記には、「夕方に季市を訪れたが、会えず。石田料理店に行き、峰籏良充君の招きに応じて飲み、座中には伊藤武雄、立田清辰、重光葵、朱造五および季市がいた。」[14] とある。1926年2月14日の日記にはまた、「晩に重光葵への手紙を出す」とある。[15] そのため、重光葵との個人的な関係から見れば、魯迅は尹奉吉の義挙について発言するのに差しさわりがあったのである。

日本の帝国主義に対して警戒の念を抱いていた魯迅に、いまだ韓国（朝鮮）を問題とせず、尹奉吉の義挙に対しても沈黙を守っていた魯迅に、「東アジア意識」を築き上げるのは不可能である。反対に、1932年の前半は、おそらく魯迅が最も東アジア意識を築き上げることが不可能な時期だったと言えるだろう。「戦事に遭遇し、終日銃声の中にいた」[16] 彼は中日両国間の対立に対して切実な体験を持っていた。日本軍の侵攻は彼の生活に直接影響を与え、彼を避難させ、日記の多く

の日が「失記」となっている。そして尹奉吉が銃殺刑に処せられた事は、また彼に日韓の鋭い対立を見せることとなった。その意味において、彼のその沈黙は「東アジア」に対する絶望と解釈することができる。

価値観の面においては、前期の魯迅は進化論者として、後期の魯迅は階級論者として、いずれも地域的価値を追求しない、しかし「東アジア」はまず第一に一種の地域的な価値なのである。これにとどまらず、魯迅の前期の個人主義思想は地域的な価値と対立するものでさえあった。周知のように、留学時期の青年魯迅は「文化偏至論」や「摩羅詩力説」などの文中において等しく個人主義思想を詳細に述べている。そして「破悪声論」(1908 年未完稿) において、「国民」や「世界人」といった地域的アイデンティティーと「個人」との対立を論じ、次のように述べている。

「今日の人々の主張するところを集めて整理し、かりにこれを分類してみると、一、「汝、国民たれ」二、「汝、世界人たれ」の二類に大別することができる。前者は、かくせざれば中国は亡ぶと恐れ、後者は、かくせざれば文明に立ち遅れると恐れている。その立場の根拠を考えてみると、いずれも一貫した主張というものはないが、しかしいずれも人間の自我を圧殺し、混然として自他の区別がつけられないようにさせ、あたかもさまざまの色を黒の一色で塗りつぶすように、群衆のなかに埋没してしまおうとしている。もしもこれに随わぬものがあると、ただちに多数をたのんで鞭打ち、攻撃し、圧迫して、服従させるのである。」(17)

ここでは、「国民」と「世界人」この二種類のアイデンティティーがすべて「人を滅ぼす自我」によって否定される。このように個人主義的価値観を持つ魯迅は、自分のためにも他人のためにも「東アジア」というアイデンティティーを構築することができなかった。後期に階級論を重視するよう転向した後も、階級論としての尺度と「東アジア」という地域的価値としての尺度との間には依然として食い違いがある。

更に注意すべきなのは、漢字と儒教が「東アジア」の文化的基盤であり、中、日、韓三国に文化的同一性を与え、漢字と儒教の文化圏を形成させたことである。そして魯迅はかつて激しい儒教批判者であり、漢字否定論者であった。この意味において、魯迅はすでに「東アジア」を脱構築していたのである。

三、魯迅の「東アジア」属性

魯迅本人は「東アジア意識」を欠いているといっても、決して魯迅が「非東アジア」であることを意味するわけではない。逆に、魯迅は先天的な「東アジア」というアイデンティティーを持っていたために、「東アジアの魯迅」は魯迅の必然的な属性となったのである。大きな論理の上から言えば、「東アジア」（北東アジア）は中、日、韓三国により構成されているので、中国性、日本性さらには韓国性（朝鮮性）を問わず、すべて「東アジア性」の要素となる。魯迅自身について言えば、その「東アジア」属性は少なくとも三つの方面から理解することができる。

第一に、周樹人が「魯迅」に成長する過程の中で、近代日本は重要な、ひいては決定的な作用さえも発揮している。1902 年 3 月に日本へ渡ってから、1909 年 8 月に留学生活を終えて帰国するまで、魯迅は日本で七年半もの貴重な青春時代を過ごした。帰国後は、彼も生涯にわたって日本の文化や日本の友人と密接な関係を保っている。日本は魯迅が唯一入った「外国」であり、日本は魯迅の思想、言語、生活、行動様式、美意識に深い影響を与えた。また、魯迅にとって、日本は日本であると同時に世界でもある――魯迅は日本を通じて西洋の哲学や文学に接触し、理解した。その大量の日本語からの重訳作品が証明している。近代日本がなければ、「魯迅」はいなかった、と言えるだろう。この意味において、魯迅自身は「非中国」であり「東アジア」であった。1943 年に日本文学報国会は魯迅を使って中日「親和」を表現しようと企図した、前提にあるのは日本が魯迅に対する重要性を意識していたことである。このような利用には十分な根拠があったが、問題は価値観の逆転にある。青年期に日本帝国主義に対して警戒心を抱いていた魯迅を使って、戦時中の日本軍国主義のイデオロギーのために奉仕させることは、実質的には「反魯迅」である。

第二に、魯迅は傑出した中国近代作家として、その作品のテーマや美学的特徴は、しばしば「中国」を超えて「東アジア」の共通性と普遍性を持っている。前述の佐藤春夫が魯迅を追悼した文章に「月光と少年と――魯迅の芸術」と題した所以は、すなわち佐藤が魯迅の作品の中から「月光と少年」というこの種の「東洋」的な主体性や普遍性というテーマを見出したからである。佐藤は文中で、「魯迅の作品を少し注意して読むと、『阿Q正伝』や『故郷』、『孤独者』などの如き比較的長いものは申すまでもなく、『村芝居』などの小品のようなものでさえ、きっ

とどこかに月光の描写と少年の生活とが表れているのは不思議なばかりである。惟うに、月光は東洋の文学の世界に於ける伝統的な光である。また少年は魯迅の自国に於ての将来の唯一の希望であった」[18] と述べている。確かに「月光は東洋の文学の世界に於ける伝統的な光である」。佐藤のこのような説にはおのずからその根拠があり、我々は日本のひいては朝鮮の文学作品の中にも必ず無数の例証を見つけることができる。これにとどまらず、魯迅の描く少年の背後に存在する子ども本位の考え方は、日本の近代作家・有島武郎（1878–1923）の倫理観とも直接関連する。[19] 魯迅の描く「故郷の喪失」というテーマは同様に「東アジア」の普遍性も持っている。『韓国魯迅研究論文集』に収録されている全炯俊先生の論文「従東亜的角度看三篇『故郷』：契里珂夫、魯迅、玄鎮健」は、すなわち東アジアの、ひいては東アジアを超える視野において関連問題を検討している。

第三に、魯迅の「近代的経験」は、東アジア諸国に共通するものである。魯迅が生きた 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけては、西洋の勢力が東洋に侵攻し、西洋のスタイルが東洋へ徐々に浸透していった時代であり、東アジア国家が植民地化・半植民地化される過程において近代国家を建設し、近代化を追求していく時代でもあった。魯迅が中国知識人として直面した文化の変容、自己批判、自己再構築などの根本的な問題は、日本や韓国の知識人が共通して直面したものでもあった。毛沢東は『新民主主義論』（1940 年）の中で、「魯迅は節を屈しない硬骨漢であり、彼には奴隷的な様子や媚態はみじんもなかった。それは、植民地・半植民地の人民にとってもっとも貴い性格である。」「魯迅の方向こそ、中華民族の新しい文化の方向である。」[20] と述べている。これらの言葉は、魯迅の品格や魯迅文化が植民地・反植民地時代および植民地・反植民地環境における特別な価値を明示したと言える。このような品格や文化精神は、同じ時代、同じ環境に身を置く日韓両国にも同様に必要なものである。この意味において、毛沢東の言葉は「魯迅の方向性は、東アジア新文化の方向性である」と言い換えることができる。そうであるからこそ、魯迅の思想は、戦後の日韓知識人ひいては中国台湾の知識人の中でようやく共感を引き起こし、さらに彼らの批判手段とすることができた。戦後日本の思想家である竹内好（1910–1977）といった人々の日本の近代性に対する考え方は、すなわち魯迅に対する考え方と密接な関係があった。関連する問題は、張夢陽先生の前出の論文「跨文化対話中形成的『東亜魯迅』」の中でもこれまでに

言及されている。彼は、「魯迅の自己反省と奴隷制への反抗という内的本質は、まさに中、日、韓三国の知識界の内的受容と一致している。」「中、日、韓三国の魯迅学界が構成する「東アジアの魯迅」は、冷静さ、深刻さ、理性的であることをもって「奴隷になることに抵抗する」という意味での抵抗を基礎としている。このような抵抗は自身が身を置く特定社会の歴史的環境の中にある奴役現象に対するものであると同時に、自分自身の奴隷根性に対する抵抗でもある。これは魯迅自身の精髄であり、長年にわたる魯迅研究者たちが人類全体の発展過程から出発して導き出した普遍的認知であり、「人文科学」の観点から魯迅を理解して得られた本当の知識である。」と述べている。

余論：「東アジアの魯迅」構築者の主体的問題

「東アジアの魯迅」の構築は単純な魯迅研究の問題ではなく、近代以来多くの東アジア人の「東アジア」理念の魯迅研究領域における顕現である。結局、近現代の東アジアには、魯迅のような「東アジア意識」が希薄な人もいれば、「アジア主義」理念を抱いている者もいる――国父孫中山はかつて「大アジア主義」を唱え、日本の岡倉天心（1862–1913）や宮崎滔天（1871–1922）もみな同様の「東アジア」概念を持っており、ひいては日本の植民地統治に反抗し、伊藤博文を暗殺した韓国民族の英雄である安重根（1879–1910）でさえ、義に殉じる前に遺言として執筆したものも「東洋平和論」である。「東アジア」は一種の地域的な価値であって、世界的で普遍的な価値ではない、しかし、このような価値は却って媒介的、道具的な価値として世界的で普遍的な価値の確立を推し進めることができる。近代以来、欧米列強の侵攻と日本の帝国主義化は、東アジアをして内部分裂状態に陥らせた。21 世紀をすでに 20 年経過した今日では、帝国主義国家は依然として日本の占領と東アジアの内部分裂（例えば歴史問題が作り出した中日韓の矛盾や、朝鮮半島の「分断」、中国の両岸問題など）を通じて、利益を獲得している。歴史から見るか現実から見るかを問わず、「東アジア」の構築は、必ず必要である。魯迅はかつて我々のために関連する歴史的経験を提供してくれた、彼の「東アジア意識」の欠乏でさえも、すべて我々が今日に構築する「東アジア」言説の重要な参考資料である。これは「東アジアの魯迅」言説の実践的価値である。

近代東アジアの内部関係は複雑であり、魯迅と東アジアとの関係も同様に複雑

である。したがって、「東アジアの魯迅」の構築は必然的に多くの複雑な問題に直面することになる。この構築は魯迅の本質と関係があるだけでなく、魯迅に対する理解とも関係があり、更に構築者のアイデンティティー、立場、言語環境とも関係している。魯迅は中国で生まれ、日本と密接な関係の中で誕生したので、中日両国の学者は魯迅を理解し研究する面で天然の有利さがある。しかし、「東アジアの魯迅」の構築という方面で、中国の学者は却って潜在的意識の中で形を変える「中国意識」（例えば魯迅が「『一個青年的夢』訳者序二」で批判したような種類）を克服する必要があり、日本の学者であれば「大東亜共栄圏」のような種類の負の「東アジア」の遺産（日本文学報国会がかつて生み出したようなもの）を清算する必要がある。比較して述べれば、韓国の学者は「東アジアの魯迅」という言説を構築する方面で、逆に特別な有利さがある。この種の有利さは三つの方面から理解することができる。第一に、地理的関係と歴史的関係、文化的根源の方面において、韓国は中日両国に介在しており、両国の中間、東北アジアの「中心」である。第二に、韓国の学者は「中国意識」式負担がなく、「大東亜共栄圏」のような負の遺産もない、「東アジアの魯迅」という言説を構築することが比較的自由である。第三に、韓国は近代日本の植民地拡大国における最大の被害国として、かつて併合され、徹底的に植民地化された、このような悲劇的な「近代」経験は韓国人と魯迅の間の交差点の一つである。日本留学時期の魯迅は文学事業に身を投じた初期、圧迫を受ける弱小民族に関心を持ち共感した、だからこそ『域外小説集』を編纂翻訳できたのである。おそらく上述の原因があることで、数十年来韓国の学者はだからこそ「東アジア言説」に対して尋常ならざる情熱を抱き続けている。三聯書店が 2020 年 6 月に出版した翻訳集『想象東亜／方法与実践——聚焦韓国「東亜論」二十年』は、このような情熱の表れである。このような「東アジア言説」は、「東アジアの魯迅」構築のために良い言語環境と理論的資源を提供することができ、そして「東アジアの魯迅」は明らかに韓国知識界の「東アジア言説」の重要な構成部分でもある。

注釈

(1)　本稿は『東岳論叢』2021 年 3 月（第 42 巻第 3 期）に掲載された論文を元に翻訳した。

(2) 【著者略歴】董炳月（1960–）、男性、中国社会科学院文学研究所研究員、博士課程指導員、中国社会科学院大学文学院特任教授、中国魯迅研究会常務副会長、秘書長。研究テーマ：魯迅、中日文化関係、中国近代文学、新疆近代文学史。

(3) ［日］佐藤春夫「月光と少年と——魯迅の芸術」章特孚訳『魯迅与中日文化交流』、長沙：湖南人民出版社、1981 年版、第 503、504 頁。
訳者注：日本語訳は『佐藤春夫全集』第十一巻（講談社、昭和四十四年）p563 による。

(4) ［日］太宰治『惜別』東京：朝日新聞社、1945 年 9 月発行。中国語翻訳本は、于小植訳、北京：新星出版社、2006 年版。関連問題については拙論「自画像中的他者——太宰治『惜別』研究」、『魯迅研究月刊』2004 年第 12 期を参照。

(5) ［日］藤井省三『魯迅事典』「前言」、東京：三省堂、2002 年版。

(6) ［日］藤井省三：『魯迅的都市漫游：東亜視域下的魯迅言説』、潘世聖訳、北京：新星出版社、2020 年版。

(7) 魯迅博物館編：『韓国魯迅研究論文集』、鄭州：河南文芸出版社、2005 年版。

(8) 朴宰雨主編：『韓国魯迅研究選集』（第二輯）、金英明等訳、北京：中央編訳出版社、2016 年版。

(9) 張夢陽「跨文化対話中形成的『東亜魯迅』」、『魯迅研究月刊』、2007 年第 1 期。

(10) この文は『学術月刊』2015 年第 1 期に発表され、趙京華『中日間的思想：以東亜同時代史為視角』に収録されている、北京：生活・読書・新知三聯書店、2019 年版。

(11) 『魯迅早年的活動点滴』、元は 1961 年 10 月号『上海文学』に掲載。『高山仰止——社会名流憶魯迅』より引用，石家荘：河北教育出版社、2000 年版、第 55 頁。文中の蔡、何は蔡元培、何閭仙を指す、二人は上海で『俄事警聞』を創刊した。

(12) 周作人：『留学的回憶』（1943 年作）。『薬堂雑文』に収録する、北京：北京新民印書館、1944 年版。

(13) 洪昔杓：『為想象東亜共存——魯迅与「朝鮮」』、『韓国魯迅研究精選集』（第二輯）、北京：中央編訳出版社、2016 年版、第 47–48 頁。

(14) 『魯迅全集』（第 15 巻）北京：人民文学出版社、2005 年版、第 583 頁。

(15) 『魯迅全集』（第 15 巻）北京：人民文学出版社、2005 年版、第 609 頁。

(16) 魯迅 1932 年 1 月 29 日日記。『魯迅全集』（第 16 巻）、北京：人民文学出版社、2005 年版、第 297 頁。

(17) 『魯迅全集』（第 8 巻）、北京：人民文学出版社、2005 年版、第 28 頁。
訳者注：日本語訳は『魯迅選集』第十二巻（岩波書店、1986 年第七刷）p. 170 による。

(18) 訳者注：日本語訳は『佐藤春夫全集』第十一巻（講談社、昭和四十四年）p. 563 による、なお新仮名遣いに改めた。

(19) 関連問題については拙稿「幼者本位：従倫理到美学——魯迅思想与文学再認識」の論述を参照。『斉魯学刊』2019 年第 2 期。

(20) 訳者注：日本語訳は『毛沢東選集』第五巻（三一書房、1971 年第 11 刷）pp. 58–59 による。